

比較家族史学会
会報 比較家族史 61

事務局 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7 弘文堂気付

学会事務連絡先 大学生協学会支援センター内 比較家族史学会

〒166-8532 東京都杉並区和田3-30-22 TEL 03-5307-1175 FAX 03-5307-1196

E-Mail : hikakukazokushi@univcoop.or.jp 郵便振替 00130-4-25222

2013年 比較家族史学会 秋季研究大会

【日 時】 2013 (平成25年) 年11月16日 (土)

【場 所】 茨城キリスト教大学 11号館 11203教室

常磐線 大甕駅下車 徒歩12分 (アクセスマップを参照)

上野駅から特急で 約1時間30分 (乗り換えの場合は2時間)

プログラム

○会長挨拶 (10時40分) 会長 高木 侃 (専修大学)

○自由報告

- 1 九州地域の婚姻動向—人口性比と人口移動を中心に—
10時50分～10時20分 工藤 豪 (埼玉学園大学)
 - 2 「夫婦喪主」の登場—新地方紙「おくやみ」欄から考察する家族パラダイム
10時30分～11時 金沢佳子 (千葉大学)
 - 3 沖縄島嶼部の子どもの民族誌—身体観・医療観に着目して
11時10分～11時40分 加賀谷真梨 (国立民族学博物館)
 - 4 高齢社会を象徴する長寿銭
13時～13時30分 板橋春夫 (茨城キリスト教大学)
- (自由報告30分 コメント10分)

○総会 (11時50分から)

○昼休み お弁当は事前にお申し込みください。当日は大学の生協食堂は休みになります。
 駅周辺に食堂はありますが、休みのお店も多いと思います。

○ミニ・シンポ「婚姻と居住 — 家族概念の再検討」

- 1 問題提示と沖縄における妻問い婚
13時30分～14時 森 謙二 (茨城キリスト教大学)
- 2 古代の婚姻と居住
14時～14時30分 栗原 弘

- 3 平安時代の婚姻と儀礼
14時30分～15時 服藤早苗（埼玉学園大学）
- 4 民俗学から見た妻問婚
15時～15時30分 八木 透（佛教大学）
- 5 討論（15時30分～16時30分）

◎懇親会

大甕クラブ

運営委員 板橋春夫・菊池真弓・小口恵巳子・森 謙二（委員長）

□運営員会からの連絡

○ お弁当について

当日、お弁当を用意いたします。近所に手頃な食堂がありませんし、この日は学園創立記念日にあたり、学園の全ての施設がお休みです。お弁当をご注文いただければと思います。

価格 1,000円

○ 懇親会について

秋季大会は、原則として懇親会を行わないのですが、遠方から来る場合にどうしても宿泊が必要になります。その宿泊者のために食事の必要もあり、今回は懇親会を開くことにしました。

参加費 6,000円 場所 大甕クラブ

○ 宿泊・大甕クラブ

運営委員会で斡旋する宿泊施設は「大甕クラブ」です。日立製作所のゴルフ場を兼ねた施設です。多くの人が泊まれる訳ではありませんが、現在11月16日（土）は全室を予約・押さえています。大甕クラブは、建物としては古いのですが、かつて天皇陛下が国体で日立に見えられた時の由緒ある宿泊施設です。ゴルフ場もありますが、これはご自分でご予約ください（アクセスマップ参照）。

予約 k-mori@icc.ac.jp 表題に「宿泊希望（16日分）」とご記入の上、お申し込みください。満室になり次第、締め切らせていただきます。

□ミニ・シンポ「婚姻と居住」趣旨

マードックは家族を定義する時、生殖単位と生活単位が一致するものとして定義してきたが、妻問婚のように比較的長い期間にわたって夫婦が同居しない婚姻形態が見受けられる。古代の妻問婚もそうであるし、沖縄における伝統的な婚姻形態も同様である。このシンポでは、森が沖縄の妻問婚について報告し、栗原が古代の婚姻と居住を報告し、服藤が平安時代の婚姻儀礼を報告する中で、沖縄と古代あるいは平安時代の妻問婚の比較をした上で、八木は日本の妻問婚の習俗を俯瞰的に話す予定である。

また、現代においても生活単位と生殖単位が一致しない形態が見受けられる。その意味では、古代の婚姻や沖縄の婚姻を見直すことによって、改めて「家族とは何か」という問題を見直すことができるのではないかと思い、このミニシンポを企画した。

□比較家族史学会理事会議事録

日時 6月14日 場所 香川大学

1 副会長・会計監査の選任について

追加 副会長 服藤早苗（企画担当） 監査 曾根ひとみ

2 学会の現状（報告・省略）

3 会計報告（決算と予算）

- ・会計報告書に不備があり、秋季大会に改めて担当者から報告の上、承認をうける。
- ・会計についての総会の承認は、秋季大会で行う。
- ・会計標準

○会計規準・平成25年6月作成（比較家族史学会）

- 1 出納帳の原簿を作成すること。出納帳は、収入原簿と支出原簿の双方を作成し、収入原簿には、預金通帳の残高も記入すること
- 2 支出の原簿（経年継続）を作成すること。但し、年度内の支出すべき金銭については「未払い金」として処理し、次年度の支出帳簿には「前年度未払い金」として赤で記入しておくこと
- 3 予算案を作成すること
- 4 予算案に応じて、支出のチェックを行うこと
- 5 請求書の妥当性をチェックすること
- 6 予算額をオーバーして支出がある場合は、予備費から支払うこと。予備費の支払いは、会計担当副会長の承認を得ること
- 7 原則として、支払いは銀行及び郵便局からの振り込みとし、少額の金額の支払いは別に定めた規則によって行うこと
- 8 年度内に支出すべきものについては、支払いが翌年度になっても「未払い金」として処理し、未払い金は次年度の繰越金には含めずに当該年度の会計で処理すること
- 9 次年度の会費など次年度の収入として計上すべきものは、前年度の会計は前受金として処理し、次年度の会計においては「前受金」は次年度の収入に含める（「前受金」は、前年度の繰越金には含めず、独立して項目を立てること）

収入原簿に記入すべき事項

- 1 繰越金
- 2 会費収入（3ヶ月に一度学会支援センターから連絡）
- 3 雑誌販売（3月に弘文堂から連絡）
- 4 著作権協会からの収入
- 5 その他
- 6 預金通帳の残額
 - 一般会計 銀行・郵便局
 - 特別会計 普通預金・定期預金

○会計監査について（標準）平成25年6月（比較家族史学会）

当該年度の会計について、会計帳簿（出納帳）および決算表を中心に、次の事項の監査をお願いします。

1 収入の合計額が妥当であるか

- (イ) 会費収入は、学会支援センターで計算しています。学会支援センターから情報を参考にしてください。
- (ロ) その他の収入は、預金口座に振り込まれるはずですが、預金口座のコピーをご確認ください。
- (ハ) 前年度の収入および予算案の収入(予測)についても監査をお願いします。

2 支出の合計額が妥当であるか

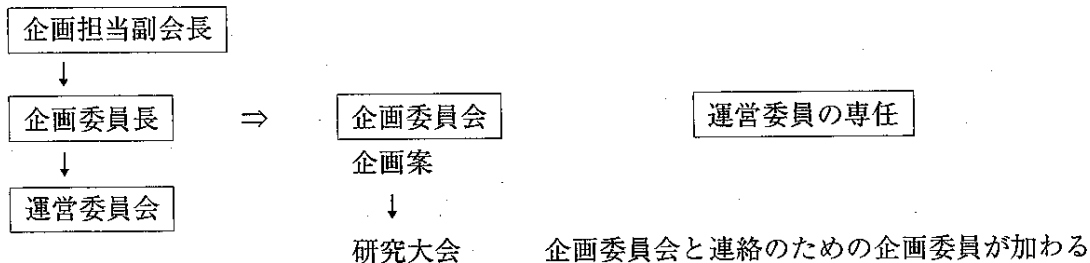
- (イ) 出納帳が原簿になりますから、原簿を確認していただくをお願いします。
- (ロ) 予算案に対して、支出が適正に行われているか、監査をお願いします。
- (ハ) 当該年度内に支出が行われない場合にも、その年度に支払うべき金銭はその年度内に「未払い金」として処理するようにしています。「未払い金」は原則として確定した金額で処理していますが、「未払い金」の処理が妥当であるかどうか監査をお願いします。

3 会計のあり方について、お気づきの点があればご指摘ください。なお、疑問がある場合には、会計担当者だけではなく、会長・副会長・理事などに自由にご質問ください。

4 学会の運営について

(A) 研究大会の運営に関連して

春の研究大会は学会活動の中核になるものであり、企画担当副会長をおいたので、あらためて標準的な運営方法を明らかにする。



○企画委員会の役割

- ・任期中の企画案(研究大会のあり方)
- ・春の研究大会の企画案 — 運営委員長と相談 副会長と相談の上、理事会で審議
- ・春の研究大会の実行の妥当性 副会長と相談の上、理事会に報告

○運営委員会の役割

- ・シンポジウムの趣旨・報告者 企画委員会と相談 理事会承認事項
- ・自由報告の決定 問題がある場合に、運営委員長が企画委員長・副会長と相談
- ・会報用原稿の作成 プログラム・趣旨・はがき原稿の作成

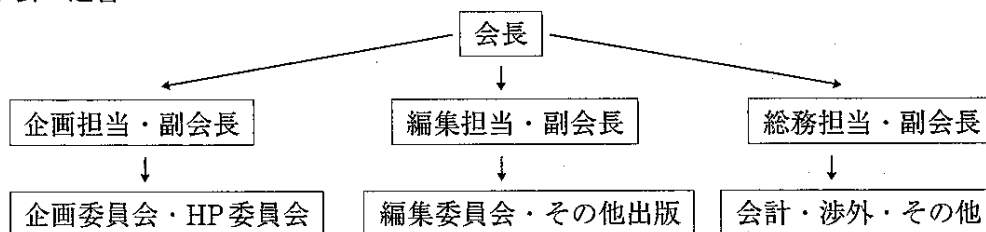
○研究大会の運営等について

- 1 企画委員会は、その任期内の企画の意味について明確な位置づけを行ってください。学会として何を目標にしているのか、比較家族史学会は何をなすべきかを議論してください。
- 2 学際的な学会ですから、できるだけ多くの分野から参加できる企画を立ててください。2011年度・2012年度では歴史が希薄な大会となりました。この点に関しては格別の配

慮は必要だと思えます。

- 3 企画委員会は、企画委員長の名前で、テーマの設定、運営委員長および報告者についての理事会の承認を受けてください。持ち回りの理事会でもかまわないと思えますので、理事会に企画書・報告予定者を書面で報告してください。企画委員長は運営委員と兼任することはできません。
- 4 運営委員会は、理事会の承認を得た後の発足となります。運営委員会は、
 - ①企画の趣旨などをまとめて、プログラム・会（シンポ）の趣旨などにまとめた会報用原稿を作成し、企画委員長・担当副会長に報告をしてください。
 - ②運営委員会は、プログラム・企画の趣旨とともに、返信用はがきの原稿その他研究大会に必要な情報を企画委員長・副会長に提出してください。
 - ③自由報告の採否は、運営委員会の裁量においてお決めください。ただし、自由報告者の会費納入等の情報および自由報告不採用については企画委員会を通じてお問い合わせください。
- 5 企画委員会は、報告者および自由報告者などの会費納入状況などの確認をお願いします。また、非会員がシンポジウムのテーマ報告を依頼する場合には、その必要性をまとめたメモを理事会に提出し、承認を受けてください。

(B) 学会の運営



1 運営委員会

会長+副会長 必要に応じて各委員会の委員長にも出席をお願いする

2 運営員会 年3回から4回

3 議題にすること

①理事会の議案についての意思疎通 ②議題の問題点の整理 ③学会の運営に関する問題

5 年報の編集に関して 編集費・査読制度について

理事会で議論するが結論出ず。査読制度・原稿超過問題について、編集委員会で審議の上、再度理事会に議題提出。

6 HPについて

なかなか充実しないが、詳細は「ニューレター創刊号」を参照。

7 2013年度秋季大会について

自由報告 3～4名（募集中）

ミニシンポ 婚姻と居住-古代・沖縄・民俗（仮 服藤・栗原・森・八木）

運営委員（板橋・菊池・小口・森） 場所 茨城キリスト教大学

8 2014年度第56回研究大会について

千葉大学に決定 運営委員長 米村千代
日程 2014年6月14日(土)、15日(日)

9 新入会員について(2013/3/31現在)

合計 2011年度 366人 入会11人 退会 24人 会員数 353人
4月以降の入会者 10名

10 シンポジウム「親密圏と家族」について

基礎法研連主催の「シンポジウム 親密圏と家族」が7月6日(土)・学術会議講堂で開催。ポスターなど配布。(このシンポジウムの内容につきましては、来年3月の『法律時報』に掲載の予定です。)

□比較家族史学会第55回研究大会を終えて

大会運営委員長 香川大学 村山 聡

2013年6月14日金曜日から6月16日日曜日にかけての三日間、香川大学において、比較家族史学会主催、環境史研究会および香川大学地球ディベロプメントサイエンス国際コンソーシアム共催で、「環境と家族」と題した研究大会を開催した。本大会には、比較家族史学会会員45名、環境史研究会会員9名(両方の学会に所属している会員はどちらかで数えている)、一般参加者7名、学生101名、大学院生4名の総勢166名の参加を得た。学会が重なったにもかかわらず、地方の大学で行なった全国レベルの学会としては盛況であったと考える。

ご存知のように、比較家族史学会が創設されたのは1982年である。1992年から2006年にかけて刊行された全20巻を数える『シリーズ比較家族』、その他の編著刊行物、さらに1996年には『事典家族』が刊行され、この増補版が計画されている。また、学会誌としての『比較家族史研究』は今年度で27号を数える。この重厚な研究蓄積は、「家族史」の専門研究の広がりや深さと精密さを実感させる。しかし他方で、次第にスタンダードな学問として定着する過程において、創設時のような熱気は感じさせなくなっているようにも思う。

海外の動向を見ても同様である。Journal of Family Historyが創刊されたのは1976年であり、そこから分離した形で新たな家族史の専門雑誌The History of the Familyが刊行されたのはその20年後の1996年である。このどちらの学会誌にも関わり、とりわけ、後者の創設に尽力したタマラ・ハレヴン(Tamara K. Hareven: 1937-2002)が世界の家族史研究を総括し記したFamilies, History, and Social Change. Life-Course & Cross-Cultural Perspectivesが刊行されたのは2000年であった。アメリカ合衆国で家族史研究が芽生えたのは1960年代とされている。黒人の公民権運動や女性解放運動が次第に社会問題の中核に据えられていった時代である。家族史研究は「いまの家族」の問題と密接に絡みながら歩んできた。それにはピークがある。ヨーロッパにおいても「家族」が社会問題の中心として捉えられ、社会史研究の主流となっていたのが1980年代であった。ウィーン大学のミヒャエル・ミッテラウアー(Michael Mitterauer: 1937-)が同大学の社会経済史研究所で人々の生活記録の聞き取りが蓄積され始めたのが1983年であった。3,000人にも及ぶオーラルヒストリーが集められた。

ところで、タマラ・ハレヴンがJournal of Family Historyから離れ、新たな雑誌を創刊したのは理由がある。ここでは詳しく言及できないが、少なくとも指摘しておきたいことは、創設時の熱気は家族史研究が学術研究として定着すると同時に次第に沈静化し、新たな息吹を吹き込もうとしていたことである。しかし彼女は、2002年に65歳で急逝してしまった。それからすでに10年以上が経過している。お亡くなりになる2年前に、アムステルダムで開催されたヨーロッパ社会科学歴史学会の際に、ゆっくりお話をする機会を得たが、家族史研究と共に歩まれたその生涯の重みを感じる対話を今も思い出す。2002年から2003年にかけて、ベルリン自由大学で比較家族史の講義をする機会を得たが、彼女への哀悼の念からその内容を構成した。

さて、本大会で共催をした環境史研究会は、2009年に第1回国際環境史学会を受けて創設された東アジア環境史協会の日本分科会のようなものである。今年の10月には第2回東アジア環境史学会が台湾で開催される。今の環境史研究は、家族史研究が1970年代80年代に有していた熱気を体感している。

「家族」を通じた社会へのまなざしが、世界中の研究者を巻き込む熱気となった家族史研究は大きな曲がり角にあるようにも思う。今回の大会での報告においては、14日金曜日に開催された藤原辰史氏（『ナチスのキッチン』第1回河合隼雄学芸賞受賞）を招いてのラウンドテーブル「環境史と家族史との対話」、比較家族史研究の研究蓄積の延長線上に位置づけられる企画セッション1「災害・資源と家族」、そしてアカデミズムの世界とは異質なものとしてセッティングした企画セッション2「グリーンツーリズムと家族」、ここでは、民間で活躍されている方々をお呼びした。そして、家族史研究と環境史研究の中間にバランスよく位置づけられる基調講演をして頂いた峰岸純夫氏の「自然災害と家族」という構成であった。さらに、4本の自由論題報告も大会のテーマである「環境と家族」にいろいろな意味で関係する報告を得ることができた。

「家族」を通して何が見えるかという問題設定から、「キッチン」、「民宿」、「Web」、「災害」などを通して「家族」をいかに見ることができるといった新たな問題設定へのきっかけを作ることのできた大会であったと思う。

この大会の三日目16日の午後2時から4時までで開催した総合討論「環境と家族：今後の展望」において、「このテーマと構成で果たしてうまくいくかどうかという危惧を払拭できた」という森副会長のコメント、そして大会を終えるにあたって、会長がお身内のご不幸により欠席されたため、最後の挨拶をして頂いた服藤副会長の「長い研究大会ですべてのセッションを聞き続けても新鮮さに疲れることがなかった」というお言葉を頂いたことは大会運営を行なった者として望外の喜びであった。これは、講演者、報告者一人一人の営為の賜物であり、今後も比較家族史学会に新たな息吹を吹き込んで頂けるであろうと確信する。

最後に、この大会の運営にあたって尽力して頂いた大会運営委員会・副委員長・廣嶋清志氏、同委員・奥山恭子氏、同じく原直行氏、服藤早苗氏ならびに米村千代氏、さらに香川大学の大会スタッフ・塩津裕太、森幸代、奥村浩基、長原有紀、片岡恵、村山倫子の諸氏にこの場を借りて感謝の意を表したい。また、大会運営経費の面では、学会からの支援に加えて、香川大学新領域・組織連携経費「新たな水文化・環境構築を目指すジオコミュニケーション学の地域・海外発信」（代表：寺尾徹）の支援を受けたことをここに記しておきたい。（2013年6月17日）

□次回研究大会についての運営委員会からの連絡

2014年度比較家族史学会第56回研究大会は以下の日程で開催します。

【日時】2014年6月14日（土）、15日（日）

【開催場所】千葉大学（千葉市稲毛区弥生町1-33）

【テーマ】「親-その複数性と多元性」

【自由報告について】自由報告の募集は、次号のニュース、ホームページで行います。なお、自由報告のテーマはシンポジウムのテーマに合わせる必要はありません。

【研究大会の趣旨】

今日、生殖技術の進展や離婚再婚、養子縁組、国際移動等により、親子関係やそれにかかわる権利が複雑化していることに注目が集まっています。また、複数の関係性のなかで子育てを担っていくマルチプル・ペアレンティングの必要性も指摘されています。血縁関係によらない親子関係や子育ての社会化がアクチュアルな問題としてあります。

比較家族史の視点から見れば、しかし、これらは決して新しい現象ではなく、子どもが（その意味は今日とは異なるにせよ）複数の親（オヤ）を持つことや、その社会化に複数の人たちがかわることは珍しいことではなかったといえます。もちろん、養親子や継親子関係、儀礼的親子関係、擬制的親子関係等については様々な解釈がありますし、今日われわれが“オヤゴ”という表現から想像する関係とはかなり異なるものもあります。

シンポジウムは、比較と歴史の視点を重視しつつ、法や権利の問題と接合し、「親とは何か」という根源的なテーマに多角的に迫ることを主眼としています。運営委員会では、比較家族史学会ならではの学際性が存分に活かされるよう目下企画を進めているところです。オーソドックスでありながらアクチュアリティもあるこのテーマを、歴史と現在を接合することで深く掘り下げたいと考えています。大会への会員の皆さまの積極的な参加をお願いいたします。

大会運営委員：米村千代（委員長）・小池誠・床谷文雄・堀田幸義